

## 「主婦性」の再生産の観点から見た家庭婦人スポーツの誕生と展開

ママさんバレーボールを事例として

高岡治子（日本家庭婦人バスケットボール連盟）

キーワード：家庭婦人 ママさんバレー 主婦性

### 【緒言】

日本女子バレーボールが東京オリンピックで金メダルを獲得した1964年を前後してママさんバレー（正式名：家庭婦人バレーボール）が誕生し、その後他の種目においても主に主婦だけを対象とした家庭婦人スポーツの活動が広がっていった。これらは主婦を解放し男女同権を実現させたと言われているが、むしろ主婦を主婦化させるための一機能であったのではないかと推論し、それを「主婦性」の再生産と名づけて、その観点から家庭婦人スポーツ活動がもたらした社会的効果と意義を、ママさんバレーを事例として明らかにする。

### 【家庭婦人スポーツの誕生と展開】

第一次世界大戦前の労働形態は家内労働であったが、二度の世界大戦を経て工業化が進むなかで、夫はサラリーマンとして外労働、妻は家で「主婦」として家事を担当するという役割分担が見られるようになった。高度経済成長期にその傾向は強まる一方、電化製品の登場により主婦に時間的ゆとりが生まれてくると、主婦たちの生活の閉塞感が社会問題視されるようになった。

このような主婦の状況下で、東京オリンピックにおける女子バレーの活躍をきっかけとして全国にバレーボール熱が高まり、主婦たちが婦人会やPTAなどでバレーボールを楽しむようになっていった。一方行政では地域変動への対応策としてコミュニティスポーツの振興を計るため、体育館の建設や各種スポーツ教室の開催を進めていった。それらに呼応する形で全国にママさんバレーが浸透していったのである。このようにしてハード面でもソフト面でも主婦の精神的行き詰まりに風穴をあける施策が展開されていった。

日本各地に広まったママさんバレーを全国的に統一しようという機運が高まり、1970年に第1回全国大会が開催された。ママさんバレーの意義や在り方は、全国大会開催の目的や理念、競技ルールに埋め込まれ、全国に伝播されていった。表1はママさんバレーの特性を要素別に分析したものである。

表1 ママさんバレーの特性一覧

要素	特性	具体例
スポーツイデオロギー	楽しみ エンパワーメント	交歓大会 女性による運営
スポーツルール	共存志向	出場制限・9人制
スポーツ文物	生活圏内	小・中学校区
スポーツシンボル	家庭婦人	明るい頼もしい
スポーツ行動様式	二義的・家庭優先	家事育児を優先
スポーツ集団	自発的	自由な入退会

(参考) 菊幸一、「近代のプロ・スポーツの成立に関する歴史社会的考察 わが国における戦前のプロ野球の成立を中心に」

### 【考察】

ママさんバレーは競技によるヒエラルキー構造の否定が活動の原点であり、それにより「主婦性」の再生産が導かれていた。それは、親善第一 大会参加資格の制限（高度競技経験者の排除や大会再出場不可） 9人制採用 生活圏内の活動 家庭優先等に発現している。このような活動を通して主婦達が生活の閉鎖性から一時的に解放され、獲得したエネルギーで再び主婦の役割を果たしていくという、解放と「主婦性」の再生産からなるスパイラル構造<sup>図1参照</sup>ができあがった。その中で主婦像は「閉鎖的主婦」「スポーツする主婦」「自律的主婦」へと変化していく。主婦の自律は活動グループへの参加、大会や連盟運営への参加などを通じての社会化によって獲得されたものである。しかしどのように主婦像が変化しようともその活動には常に「家庭婦人」という冠がかぶせられ主婦性の維持が図られていたのがママさんバレーの特徴である。

### 【結論】

1970年代は1960年代からの高度経済成長の継続と、地域振興が政治課題となっており、ママさんバレーはその政治課題に対応するような形で展開したといえる。活動者はスポーツ活動により得たエネルギーで夫を良質な労働力として社会に送り出し、一方継続的な活動により地域社会の活性に寄与した。このような観点からみると家庭婦人スポーツの活動は、主婦たちに男女同権をもたらしたというよりも、既婚女性に付与された主婦役割を強化させたものであり、社会規範を変化させる方向には作用しなかったことが示される。図1は以上を図式化したものである。

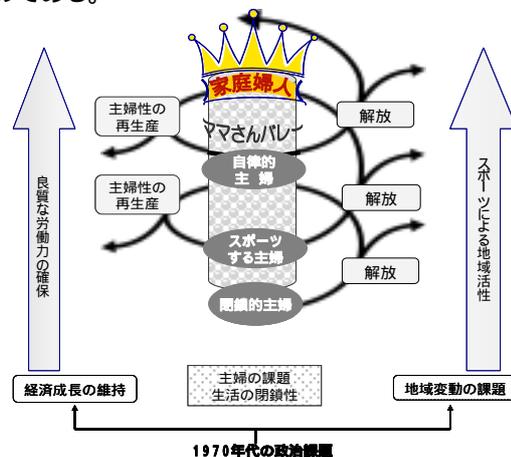


図1 1970年代の政治課題とママさんバレー  
(参考) 佐伯年詩雄「スポーツ政策の歴史と現代」  
『現代スポーツ評論』15巻、2006